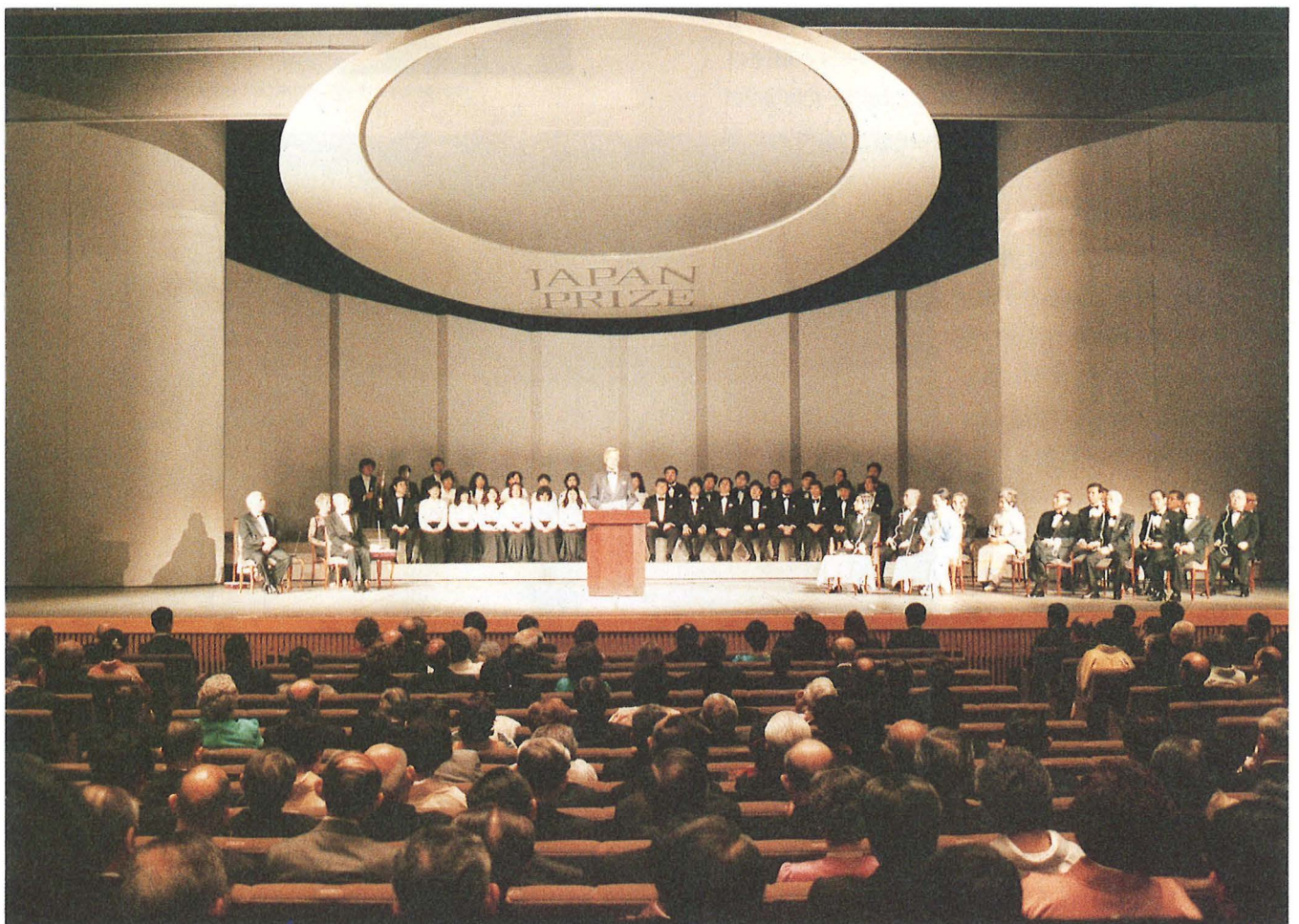




JAPAN PRIZE

News

1985年11月
Vol.1 No.1



東京・三宅坂の国立劇場で行なわれた第1回ジャパン プライズ授賞式

■ 発刊のことば

科学技術の新しい賞が誕生しました。「日本国際賞(ジャパン プライズ)」といいます。

この賞を国民の賞として多くの人々に知っていただきたいために、このようなニュースレターを年2回程度発行することにいたしました。

1985年4月20日、第1回の授賞式が東京で行われました。この授賞式において皇太子殿下から「…今後この賞が世界の科学技術の進歩に寄与すると共に、それによって人類の繁栄と福祉が増進され、ひいては世界の平和に貢献することになるよう期待するものであります」とのお言葉を賜りました。

科学技術の成果は、主として20世紀の所産です。1901年に発足したノーベル賞は物理学、化学、医学・生理学、文学、平和さらに後年経済学が設けられましたが、科学技術にまで及んでいません。ジャパン プライズは、その新分野においてノーベル賞を補完する役目をも担っています。

多くの方々のご期待に添うよう、平和への願いを込めてこの賞を立派な国際的な賞に育て上げたいと願っています。皆様の積極的なご理解とご協力を心から願います。

創意と協力による進歩めざし「日本国際賞」スタート

皇太子ご夫妻をお迎えして、 第1回授賞式

雨模様の空も晴れた4月20日午後4時半、濠をへだてて皇居を望む東京・国立劇場でひとつの新しい賞が、その歩みを始めました。科学技術の発展と世界の平和を目指して創設された日本国際賞の第1回授賞式が、皇太子ご夫妻をお迎えして行われたのです。式には中曽根首相、ノーベル財団のS・ラメル理事長、スウェーデン王立科学アカデミーのガネリウス教授はじめ外国高官、国内の学者等約1,500人が出席して、受賞者の栄誉をたたえました。

皇太子殿下は「日本の繁栄には外国の学者、研究者の協力がありました。世界の科学技術の発展に寄与した人の栄誉をたたえるのは大きな意義があります」と述べられました。

中曽根首相の祝辞に引きつづいて、国際科学技術財団の松下幸之助会長から両博士に賞が手渡されました。あいさつに立ったピアース博士は、「私の研究は人類の平和を目的としており、これが認められたことはうれしい。今回の受賞はわれわれの科学技術の発展・進歩には国境がないことを示しています」とその喜びを語り、また、カチャルスキー博士は、「酵素工学の分野で日本の科学者はすばらしい成果をあげている。バイオテクノロジーは、よりよい未来を約束するものだと考える」とあいさつしました。

最後に、モーツァルトとオネゲルの曲を大町陽一郎氏指揮の東京交響楽団が演奏して、記念すべき日本国際賞の第1回授賞式を終わりました。

1時間後、舞台をホテル・ニューオータニに移して、祝いの晩さん会が開かれました。皇太子ご夫妻、受賞者、寺田最高裁判所長官、竹内科学技術庁長官、鈴木東京都知事、外交団代表、ノーベル財団代表らのメイン・テーブルを囲んで約800名が出席し、乾杯を重ねて両博士の受賞を祝いました。

ローソクの灯煌々華やかな祝宴は、そのあと、別室での皇太子ご夫妻、受賞者を囲む和やかな懇談に移り、春の宵、予定をはるかにこえて続けられました。



ホテル・ニューオータニでの祝宴で乾杯の辞をのべられる皇太子殿下



ホテル・ニューオータニの間で行なわれた祝宴



表敬訪問で中曽根首相と歓談するピアース博士夫妻(左)とカチャルスキー博士夫妻(右)

プロフィール 第1回受賞者



ジョン・R・ピアース博士

スタンフォード大学客員名誉教授。1910年生まれ。

通信衛星の可能性の理論的解明と実験的検証、パルス符号変調や多値符号による広帯域デジタル伝送の理論的解明、ローカルエリア網(LAN)の開発など情報・通信工学分野で数多くの画期的業績を挙げている、米国を代表する科学者。日本の情報通信技術の発展にも大きく貢献。



E・カチャルスキー・カツィール博士

イスラエル・テルアビブ大学教授、ワイズマン科学研究所教授。1916年生まれ。

バイオテクノロジーの基盤技術の一つである固定化酵素や固定化細胞を用いるバイオリアクターやバイオアナライザーの発見と開発を行なった歴史的先駆者。アメリカ科学アカデミー会員に選ばれた最初のイスラエル人。1973～78年、イスラエル共和国第4代大統領に就任。



つくば科学万博を楽しむ両博士

産的な研究者に自由と支援が与えられること」だと述べ、カチャルスキー博士は酵素の固定化技術、酵素反応器などの現状と将来の見通しを語り、今後の進歩のために国際的な協力を強調するとともに「しかし、科学技術より高い価値があるのは、公正、正義そして愛です」としめくって集まった人々に深い感銘を与えました。

東京と京都で受賞記念講演会

初の受賞者、ピアース博士とカチャルスキー博士の受賞記念講演会は東京と京都で行なわれ、学者やメーカーの研究者など熱心な聴衆の盛んな拍手を浴びました。

ピアース博士はその講演の中で、これまでの研究活動を振りかえって技術研究を進めるうえで重要なことは「才能があり生



日本学術会議を表敬訪問する両博士夫妻



受賞記念講演会(京都)

第1回「日本国際賞週間」中の主な行事

受賞者の業績を讃えと共に、科学技術の知識及び思想の普及啓発を図るため、「日本国際賞週間(ジャパン プライズ・ウィーク)」を設けました。

- 4月19日(金) 内閣総理大臣表敬訪問／日本学士院訪問
／日本学術会議訪問／合同記者会見
- 4月20日(土) 授賞式及び祝宴
- 4月21日(日) 記念講演会(東京・朝日ホール)
- 4月22日(月) 天皇陛下謁見／受賞者の在京大使館主催
レセプション(イスラエル)
- 4月23日(火) 記念講演会(京都・国立京都国際会館)
- 4月25日(木) 受賞者の在京大使館主催レセプション
(アメリカ)
- 4月26日(金) 科学万博見学

JAPAN PRIZE—ノーベル賞と並ぶ国際賞に…

全世界の科学技術を 対象に創設

人類の繁栄と平和は、時代を超え、すべての人々にとって共通の願いです。そのために科学技術の果たす役割は極めて大きく、しかもその進歩は広く世界の人々の創意と協力によって初めて達成されるものです。

「日本国際賞(JAPAN PRIZE)」は、科学技術の分野で独創的・飛躍的な成果をあげ、その進歩に大きく寄与することで人類の繁栄と平和に貢献した者に与えられます。この種の賞では異例の「閣議了解」を得て、財団法人国際科学技術財団(8ページ参照)により創設されました。

受賞対象は広く科学技術の全分野にわたりますが、2~3の分野を選定し、それを授賞対象分野として毎年予め指定します。

受賞は原則としては個人が対象になりますが、少人数の研究グループが選ばれることもあります。受賞者には賞状、賞牌及び賞金が授与されます。第1回の賞金は1人5,000万円でした。授賞式は毎年4月、東京で行なわれます。



賞牌(亀倉雄策氏作)

その結果、昨年6月30日の締切日までに内外から432件の推薦書が寄せられました。これらは、国際科学技術財団に設置された第一回日本国際賞審査委員会(委員長・吉識雅夫東京理科大学学長)で審査され、受賞候補者2名が選ばれました。情報通信分野から米国のジョン・R.ピアース博士、バイオテクノロジー分野からイスラエルのE.カチャルスキー・カツィール博士です。

本年2月、財団理事会は審査委員会からの推挙を受けて、この2名を第1回日本国際賞の受賞者に最終的に決定しました。

(注)世界各国の次に掲げる者を推薦有資格者として、日本国際賞受賞候補者の推薦を求めました。

- アカデミー会員および準会員
- 学会の代表者およびこれに準ずる者
- 著名な大学の学長、学部長および教授
- 著名な科学技術団体および学術研究機関の長またはこれに準ずる者
- 日本国際賞受賞者およびその他の権威ある賞の受賞者
- その他、本財団が適当と認める有識者

第1回の受賞者が 決まるまで

第1回の対象分野には、情報・通信、医用工学及びバイオテクノロジーの3分野が指定され、昨年3月、受賞候補者を推薦していただくための依頼状が日本を含む世界70カ国の推薦有資格者(注)に送付されました。依頼状は5,826通にのびりました。



第一回審査委員会(東京・日比谷 松本楼)



ジャパン プライズを受賞するカチャルスキー博士夫妻(左)とピアース博士夫妻(右)
(東京・国立劇場)



受賞者発表の記者会見(東京・経団連会館)

ジャパンプライズ第2回(1986年) 受賞候補者の推薦と審査

■1986年4月に授与が予定されている第2回「日本国際賞」の受賞候補者を推薦していただくために、内外の科学技術者等、いわゆる推薦有資格者約7,300名に対し1985年3月末日までに推薦依頼状が発送されました。

今回の授賞対象分野は、次の2分野としました。

- ①材料工学…金属その他の無機物、有機物を問わず、構造材料から機能材料までのあらゆる材料を対象とし、その材料科学および材料技術の全般を含みます。
- ②医療技術…高度な工学技術を応用した診断機器・治療システムの開発、医療に直結した生命現象の工学的解析、遺伝子工学技術等を利用した生物学的診断と治療などを含みます。

ちなみに、受賞候補者は生存者に限り、国籍・職業・年齢・性別は問いません。自薦は受け付けません。原則として科学技術についての先進的業績が賞の対象となりますが、業績が相当過去のものでも、その意義が最近になって評価されているものは賞の対象になります。

世界各国の郵便事情等を考慮して本年6月30日までの消印のある推薦書は有効として受理しました。受賞候補者の推薦依頼は世界72ヶ国に対して発送しましたが、推薦書は28ヶ国から届きました。

第2回分野別候補者(推薦者)数

材料工学	194 (133)
医療技術	209 (143)
計	403 (276)

注)同一人が重複して推薦されている場合があるので、これを除いた数を()で示しました。

■本年7月、第2回日本国際賞審査委員会を設置し、直ちに審査を開始しました。審査委員長には前回の委員長であった吉識雅夫博士が再任されました。受賞者の決定は1986年1月末頃になる見通しです。

今回の推薦は、すでに6月30日に締切りましたが、第3回以降の推薦書を希望される方は住所、氏名、年齢、職業(勤務先)を明記して当財団に申し込んでください。推薦有資格者(4ページ参照)に該当する方については当財団に登録し、次回以降の推薦依頼状をお送りします。



お・知・ら・せ

「日本国際賞」記念出版物

日本国際賞をさらに意義深いものとするために、第1回の授賞を契機として、今後、受賞者の業績等を中心とした記念出版物の刊行を計画しています。

第1回受賞者の自叙伝

第1回日本国際賞の受賞者に選ばれたジョン・R・ピアース博士とE・カチャルスキー・カツィール博士の自叙伝が刊行されます。これは、両博士が離日されるに先立ち、財団が主催した送別パーティの席上、川村皓章財団常務理事により提案され、両博士の快諾と参会者の賛同を得て、実現の運びになったものです。原稿は近く財団に届けられ、日本語に訳されて、1986年3月頃刊行される予定です。

B5版、200ページ程度、価格は未定です。

第1回日本国際賞の公式記録

日本国際賞の創設から第1回ジャパンプライズ・ウィークの諸行事までの全容を収録した公式記録(日本語・英語合本)を製作中です。

ノーベル賞と肩をならべる国際的な賞に育てあげたいとする関係者の熱意が実現させた第一回授賞式や記念講演会等の模様が、多数の写真とともに刻明に記録されています。価格は無料です。

完成は12月の予定ですが、この記録を希望される方は郵送料(国内:¥700、海外・船便:¥770)を添えて当財団にお申し込み下さい。

先着100名の方に差し上げます。

「ジャパン プライズ1985」VTRを製作

ジャパン プライズの設立、受賞者の決定、および受賞者の来日から授賞式、祝宴、記念講演会、筑波科学万博見学まで、第1回「ジャパン プライズ・ウィーク」のすべてを収録した20分のVTRを制作しました。

テープはVHS(3本)、ベータ(2本)の両方があります。ご希望の方には無料貸出しいたしますので財団事務局までご連絡下さい。

à la carte

ノーベル賞と日本
— 平和のための科学 —

ステイグ・ラメル

1985年4月20日の第1回
授賞式でのあいさつから

ノーベル賞の創設と近代日本の幕開けは正に時を同じくしています。アルフレッド・ノーベルの発明が近代工業社会の発展に決定的な役割をはたしている頃、日本は日本の国際化にとって決定的だった明治維新を迎えていました。

しかし、ノーベルの輝かしい発明は、彼自身がいみじくも見通したように、それ自体の中に自己破壊の種をはらんでいました。つまり、科学技術を戦争の具にしようと思えばできるということです。地平線にたなびく戦雲を見た晩年の彼は自らが創り出したものの平和利用を熱望し、その願いはノーベル平和賞として結実したのです。

日本が経験したほどの科学戦争の恐怖はまだ世界のどこの国も経験していません。人類の思恵のために、というノーベルの科学思想が熱烈な共感を日本で得た理由はその辺にあると思われます。

ノーベルはまた自分の創設した賞が最高の発見に対して与えられるよう望みました。優秀性に対するこうした意志が日本の大きな特質になっていることは注目すべきです。この国の文化の特徴のひとつは、精巧なもの、洗練されたもの、最善のものを達成しようとする、つまり、優秀性の追求です。今日の日本の原動力になっております。またこの国が国際的な進歩発展に決定的な貢献をなし得てきたものは、この優秀性に対する不屈の意志に他なりません。

私たちは日本国際賞が創設されたことを喜んでいます。私たちは国際科学技術財団を世界の大賞贈呈財団のひとつとしてだけでなく、人類に思恵をもたらす科学技術の発展を促進してゆく友人同志だと考えております。

本日は、日本国際賞の第1回授賞式という歴史的な場に、ノーベル財団代表として出席させていただき誠にうれしく思っております。あわせて、最初の受賞者の方々に心からお祝い申し上げます。

(ノーベル財団理事長)



授賞式であいさつするラメル ノーベル財団理事長

大事に育てたい
日本国際賞

毎日新聞・社説

1985年2月17日付毎日新聞
の社説から転載

和製ノーベル賞を目指して創設された日本国際賞の第一回受賞者が15日発表された。同賞は科学技術の分野で独創的・飛躍的な成果をあげ、科学技術の進歩を通じて人類の平和と繁栄に貢献した者に贈る賞である。五千万円の賞金はノーベル賞(邦貨換算四千八百万円)をわずかに上回る。

この顕彰事業を行う国際科学技術財団は一昨年、松下幸之助と松下電器産業からの拠出金で設立された。わが国として国際社会にいささかなりとも貢献したい、との考えに基づいたもので、日本国際賞の創設については政府も閣議で「関係行政機関が協力すること」を申し合わせている。

優れた研究業績をたたえ、顕彰することは科学技術進展の推進力となる。その意味でノーベル賞は重要な役割を果たしてきた。ノーベル賞を目指して科学の道に入り、勉学・研究に精進した俊英は少なくないだろう。受賞者に寄せられる称賛と敬意は、若い科学者への発奮剤にもなっている。

しかし、ノーベル賞の対象となる自然科学分野は物理学、化学、医学の三つに限られる。工学を中心とする多くの学問領域が対象外となっている。新設の賞がこれらの分野に光を当て、ノーベル賞を補完する役割を果たせば、その意義は非常に大きい。

わが国は現在、技術大国の地位を固めているが、最も成果をあげているのは製品化技術である。このため、欧米からは「基礎研究より実用化研究を重視する国」「利益につながる研究に力を入れる国」といった印象を持たれていた。しかし、これだけの経済的繁栄をとげた今日、「技術エゴ」のイメージは払拭(しょく)する必要がある。それには非利己的な国際的役割を果たすことが肝要で、日本国際賞の創設もこれに沿うものと評価したい。

ノーベル財団のラメル理事長によると、ノーベル賞の際立った権威を支えている要因は①基金(賞金)が大きい②国際的な性格③授賞機関が中立的な小国にある④選考に多数が関係し、公正である——の四つだという。

このうち日本国際賞は初めの二つは満たしている。最も大切なのは、おそらく四番目の要因で、特に受賞者が優れていることが望まれるが、幸い第一回受賞者となった二人は、ともに世界第一級の研究者だった。

「情報・通信」部門で受賞したジョン・R・ピアース博士(米スタンフォード大客員名誉教授)はマイクロ波通信、衛星通信

などの理論的解明と実現に中心的役割を果たした異才。「バイオテクノロジー」部門のエフライム・カチャルスキー・カツィール博士(イスラエル・テルアビブ大学教授)はバイオ技術の大きな柱であるバイオリアクターとバイオアナライザーの発見と開発を行った歴史的先駆者である。

第二回、第三回と超一流学者の受賞が続けば、賞の権威もおのずと高まっていくに違いない。そのためには審査過程で広く海外の専門家の意見を聴くことや、ときにはノーベル財団との話し合いも必要だろう。受賞者発表会に一握りの外国人記者しか出席しなかったことから、広報活動に力を入れることも今後の課題と言えそうだ。

科学技術の土壌にまかれた日本のタネが大事に育てられ、まっすぐ成長していくことを期待する。

平和への寄与願い 「日本国際賞」に奔走

横田喜三郎

1985年5月14日付読売新聞
から転載

「忙中閑あり」という言葉がある。忙しい中にも、わずかなひまはあるもので、そのわずかなひまを心のまま楽しむというときに、よくいわれる。

それと反対に、「閑中忙あり」ということもあるのではなからうか。聞いたことのない言葉であるが、たとえば、現役を退いて、悠々自適の日々を送っているときに、思いがけず忙しい用事ができ、数週間も、それ以上も、苦勞して飛び回らなければならないことがある。「閑中忙あり」というべきであろう。

わたくしは、もう20年近く、悠々自適の日々を送っている。70歳の定年で最高裁判所を退官したときに、これからは責任のある仕事はいっさい引き受けず、悠々自適の生活を送ろうと思った。(中略)

ところが、去年の暮れから今年の春にかけて、非常に忙しかった。それは日本国際賞のためであった。この賞は、科学技術に関して顕著な卓絶した業績を挙げた人に、その功績を顕彰し賞金を与えようというものである。受賞は二人で、一人に五千万円ずつである。この金額は、だいたいノーベル賞と同額である。

この賞は、松下幸之助氏の寄付した基金を基礎としたものである。そのために国際科学技術財団が設けられ、わたくしは、その理事長になった。十数年も前から悠々自適の生活をしているわたくしとしては、本来なら理事長を引き受けるのではなかった。しかし、ぜひと強く頼まれたほかに、この賞が結局には世界の平和に寄与することを思って引き受けた。

科学技術の進歩は、人類の繁栄と福祉の向上に寄与する。



国際科学技術財団 横田理事長を中心に記念撮影(総理官邸)

人類の繁栄と福祉が向上すれば、おのずから世界の安定が得られ、平和の確保に役立つ。わたくしは、若いときから国際法を研究し、世界の平和は一生の念願であった。その平和に役立つというので、つい引き受けたのであった。

もう一つ、賞が日本国際賞と名づけられ、松下賞とされなかったことも、理事長を引き受けた理由であった。この種の賞にはほとんど常に寄付者の名がつけられている。「だれだれ賞」というのである。そこに、なんとなく寄付者の自己顕示的な意味が見える。松下氏は、ことさらにそれを避けられた。それによって日本国際賞は、まったく純真に科学技術の進歩を促進し、世界の平和に寄与する賞になった。

この賞をもちたて、ノーベル賞にも比べられるような賞にすること、それが国際科学技術財団の使命であり、わたくしの念願でもある。もとより、ノーベル賞は一世に近しい歴史をもち、世界で最高の権威をもっているのに、日本国際賞は、まだ発足したばかりである。しかし、世界の業績を客観的に検討し、適正に賞の授与を行ってゆくならば、やがてノーベル賞に比べられるような世界の賞となることも、決して不可能ではないであろう。

こうした日本国際賞のために、とくにその第一回の賞の決定と授与のために去年の暮れから忙しかった。わけても4月20日の授与の式典と祝宴を中心として、10日あまりの間は、まったく多忙の日夜が続いた。平生ゆうゆうと暮らしていただけに、いっそう身にこたえ、へとへとに疲れた。しかし、幸いに朝野の暖かい支持と協力を得て盛大に式典と祝宴が行われ、一週間にあまる行事がらっぱに終了した。

わけても感銘深いことは、式典と祝宴で皇太子殿下と同妃殿下のご臨席とお言葉をいただいたことである。このことは、日本国際賞に高い榮譽といちじるしい重みを与えるものである。また、ノーベル賞の代表者がわざわざお祝いにやって来られたことである。ノーベル財団のラメル理事長とスウェーデン王立科学アカデミーのガネリウス事務総長は、遠いスウェーデンからはるばるやって来られ、式典でも祝宴でも暖かいお祝いの言葉を述べられた。これで、日本国際賞はノーベル賞と深い友好と協力のきずなで結ばれたことになる。

(国際科学技術財団理事長・東大名誉教授・元最高裁長官)

国際的視野から科学技術の振興に寄与

「人類の繁栄と平和がすべての人々にとって共通の願望であることに鑑み、これに貢献する科学技術の進歩を目指して、その研究を奨励すると共に科学技術に関する知識および思想の総合的な普及啓発を図る」——ことを目的として、

財団法人 国際科学技術財団は、1983年(昭和58年)5月5日、内閣総理大臣(総理府本府、科学技術庁)、外務大臣および文部大臣が所管する公益法人として正式に発足しました。

その主な事業は;

- (1)科学技術の進歩に大きく寄与した内外の科学技術者の業績について調査研究する。
- (2)内外の著名な科学者を招いて、シンポジウムあるいは講演会等を開催する。
- (3)広報パンフレットや研究論文等を刊行する。
- (4)科学技術の分野で顕著な業績を挙げた者に対して、「日本国際賞」を授与し、その業績を顕彰する。
- (5)内外の科学技術関係機関、団体等と密接な連絡、提携および協力をはかる。



財団のある市政会館(東京・日比谷)

国際科学技術財団は、この財団の設立に尽力した松下幸之助氏(松下電器産業株式会社相談役)を会長とし、国際的にも信望の高い横田喜三郎理事長(元最高裁判所長官)ほか各界の有識者によって構成された理事会により運営されています。さらに、諮問機関としての評議員会、日本国際賞受賞者選考のための著名な学者による審査委員会等が設けられています。

大きく育てたい日本国際賞

財団の前身は、1982年(昭和57年)の11月1日に内閣総理大臣の許可によって設立された日本国際賞準備財団です。従って前述の事業のなかでも特に大きな事業は、わが国で生まれた「日本国際賞」を世界の人々の関心と支持のもとに立派な国際的な賞に育ててゆくことです。

1983年(昭和58年)10月28日、政府は「日本国際賞」の創設について次のような閣議了解を行ないました。

日本国際賞の創設について

財団法人 国際科学技術財団が授与する日本国際賞が、人類の平和と繁栄のために科学技術が果たす役割についての認識を深め、広く人類の発展に寄与しようとするものであることにかんがみ、その実施に関し、関係行政機関は必要な協力を行うものとする。

(昭和58年10月28日 閣議了解)

記念すべき第1回日本国際賞の授賞式は、皇太子同妃両殿下をはじめとする内外の高官を迎えて、本年4月、東京・国立劇場で行なわれ、国内だけでなく海外でも大きな反響を呼びました。財団は、今後も各界の有識者の方々のご協力を得て、わが国が世界に誇ることのできる権威ある国際的な賞に育てあげたいと念願しています。

〈編集後記〉

「JAPAN PRIZE NEWS」の創刊号をお届けします。多くの方々とのコミュニケーションを図るために、ニュースレターを発行することは、準備財団当時の夢でした。それが第1回の授賞式を行なった年によりやく実現できてうれしく思います。

ジャパン プライズは、関係者の方々の温かいご協力により順調にその第一歩を踏み出しました。今後、着実に力強く歩みをのびたいと思っています。

卒直なご意見、ご批評をお聞かせください。(編集部)